

妻が福山雅治さんの大ファンで、彼の主演映画が公開されるたびに観賞のお相伴に与っている、というくだりは以前も書きました。そしてこの度の新作は『マチネの終わりに』。平野啓一郎氏の同名小説の映画化です。

世界的な天才クラシックギタリストの詩野（福山雅治）と、フランスの通信社で活動する国際ジャーナリストの洋子（石田ゆり子）との運命的な出会いと別れと再会を、クラシックギターの音色に乗せて描いた大人の恋物語でした。

還暦前の爺さんが語るには気恥ずかしい内容ではありますが、逆にこの映画はそれなりの歳月を重ねた人ではないと素直に入り込めない相貌を持った作品ではないかと思えます。自分の人生を登場人物のそれに投影して、ある程度の意識を同化させることができないと、二時間十分もあるこの気怠い映画を見続けるのは結構しんどいに違いありません。

銀幕を見詰め、科白を聞きながら、左隣に座っている妻を意識しつつ『ああそいうえば、結婚する二年ほど前にあった見合いの話を受けていた

ら、もしそれで縁談が纏っていたらオレの人生はどうなっていたのだろう。そのときの相手の女性は、今どこで何をしているのだろうか』などとすっかり忘れていた記憶が蘇り、アンジャッシュのコントのようなすれ違いで別れた二人がこの後どんな結末を迎えるのが気になって、最後まで時間を持て余すことなく見終えることができました。

僭越ながら分ったような口を叩かせて頂きますと、この映画を見て何これ？と感じた方は、まだ人生の積み重ねが足りない人。とても良かったと感じた方は、今の生活に何がしかの幸福を見出している人。不覚にも泣いてしまった方は、過去を引き摺っている人。福山雅治さんはやつぱし素敵、格好ええなあと（恐らく）思っているのは左隣の人。石田ゆり子さんは可愛いけどオバちゃんになっちゃったなあ、と思ったのはその右隣の人。

それにしてもガラ空きの間、我々の前方中央あたりで一人ぼつねんとしていた中年らしき男性は、果たして何を思ったのでありましょうか。



手作りの暮らし 2 32

木幡智恵美

干し柿 (3)

出雲の庭に突っ立っている一本の柿の木は、生り年が大体隔年で、荒神さん祭りの時季が近づくと、「そろそろ柿を採るか」と母と話したものだ。太い竹の先を割り、そこに小枝を挟んだものが柿採りの道具。竹を柿の実のついた枝めがけて伸ばし、割れ口で枝を挟み、捻って折る。落ちたら実が割れるので、道具を使わない方は下で実を受け止める。祖母が亡くなった後は、母とそうやって柿を採ってきた。

生り年で、大量に採れると、半分は合わせ柿にする。五右衛門風呂をいつもより熱めに沸かし、ヘタの中央に穴を開けた柿の実を袋に入れて密閉し、風呂桶の中に漬ける。一晚湯で暖まった柿の渋はあらかた抜ける。二三日置くと、渋はすっかり抜け、甘い柿になる。

家が改装され、五右衛門風呂が無くなったからは、焼酎で渋抜きをするようになった。ヘタの真ん中に開いた穴に焼酎が入り込むように、柿を一つずつ焼酎の入った器に漬けていく。それらをまとめて袋に入れて密封し、五日ほど置くと渋は抜ける。

柿の収穫量によって、合わせ柿と干し柿の比率は変わってくるが、採れる年は毎年両方を作ってきた。母が亡くなった後は、夫が柿採りの相棒だ。

そして、今年、まだ十月に入ったばかりの畑行きの際、木を眺めると、実がすでに色づいている。西側はまだ緑色なのに、東側、南側の陽がよく当たる側には熟柿までできている。「お父さん、柿、少し採るか」「高枝切りばさみ、持って来てないぞ」「届くところだけ」

ということ、たわなに実って手が届くところまで下がった枝に付いた柿を採った。脚立に登って採ったのを合わせると、七、八十はあつたらうか。実を落とした枝は定位置に戻っていた。この第一弾で収穫した柿は、合わせ柿、干し柿と半々に作り、どちらもうまくいったのだ。

30代フリーター やあ、ジイさん。香港が中国に返還されて初めて民主派が区議会議員選挙で過半数を獲得した。**年金生活者** どんな独裁国家も、国家からの権力の分散という世界的な流れから逃れられないことを示している。

現在見られる国家からの権力の分散は、資本主義の高度化とテクノロジの発達をもたらしたものだ。消費の過剰化が個人への、産業のソフト化が企業への、資本のグローバル化が国家間システムへの権力の分散を駆動した。

香港のデモは、分散した権力を手にした個人がそれを行使した結果だし、北京政府が近年ずっと香港への締めつけを強めてきたのは、分散した権力を回収する作業と見ることが出来る。

香港の事態は、外から見えない中国本土の事態が可視化されたものと考えることが出来る。デモと区議選での民主派の圧勝は、共産党独裁下の中国本土でも国家からの権力の分散が進んでいることを私たちに推定させる。習近平

いる（11月22日朝日新聞朝刊）。これを言い換えると、安倍晋三は擬似的な下野と擬似的な政権復帰を繰り返す「ひとり政権交代」を演じているということだ。不祥事や失政で国民の不評を買った後に反省や方向転換を表明したり、新たな政策課題を掲げたりして、政権が更新されたように見せてきた。多くの国民が反対した安保法制の強行のあとの「経済最優先」。森友・加計問題のさなかの「働き方改革」。近いところでは大学入学共通テストへの英語民間試験の導入中止や来年の桜を見る会の中止がある。

かつての自民党は、派閥の間で疑似政権交代を繰り返してきた。小選挙区制の導入で派閥の力が弱まった前世紀末ごろからそれが難しくなり、自民党結党後初めて野党への政権交代が起きた。細川連立政権が成立し、やがて本格的な政権選択選挙による鳩山民主党政権が誕生した。

だが、沖縄の基地問題や消費税増税問題で公然と公約破りをする民主党政

平政権が露骨な独裁の強化をはかってきたのは、分散した権力を回収しようとして躍起になっている証左にほかならない。

30代 安倍晋三だつて独裁的な振る舞いが目に余る。それなのに、朝日新聞の世論調査だと、首相在任期間（通算）が歴代最長になった彼の実績を「評価する」が62%にのぼっている（11月19日朝刊）。

年金 不祥事は相次いだものの、国民を大きな不安に陥れるような失政のなかった政権への評価としては的外れとはいえない。

他方で「評価しない」が36%あり、その理由を推測すると、「独裁的」というところに集約されそうだ。「安倍一強」と呼ばれ、周囲の付度を誘い、説明責任を果たさず、文書を隠蔽・改竄する、といったことがそれを示している。

この独裁的な特性は程度の差はあれ、トランプ、習近平、プーチンらと共通している。国家からの権力の分散

権の姿を目的の当たりにした国民は、政権交代そのものへの失望を深めた。安倍政権は他派閥にも、野党にも政権を奪われる可能性が少なくなった異例の政権ということができる。

30代 そのわりには過去の長期政権のような安定感がない。

年金 「株価と支持率をずっとチェックしているのも、不安にかられているからだろう」と辻田は指摘する。つまり政権を恐れさせるものが、他派閥や

を別の言葉で表すなら、歴史の方向を決定する力が、政治の領域から社会の領域へ、国家から市民社会へ移ってきたということだ。そのぶん国民の多くは政治、国家に以前ほど重きを置かなくなつた。政権担当者の独裁的な振る舞いのある程度まで許しても自分たちに不利益にならないと考えるようになった。

30代 自由や平等の理念が衰退し始めたということか。

年金 政治のレベル、国家のレベルにだけ目を向ければ、そう見えるかもしれない。だが、政治と社会、国家と市民社会を合わせた社会の総体を見るなら、そうは言えない。自由や平等が生活レベルで脅かされるのを感じれば、大勢がそれに抵抗することは、香港の若者たちの反乱が示している。

30代 日本では反乱も政権交代も起こりそうにない。
年金 辻田真佐憲という近代史研究者が安倍政権を「短命と短命がくつついた数珠つなぎのような政権」と評して

野党に代わって国民世論や市場に移つたということだ。

現在の与野党は一部を除いて政策に大きな差がなく、手順や程度の差がほとんどと言っている。もし本質的な差があるとすれば、あるいはそれをつくれるとしたら、理念の差だ。

安倍政権は支持率を上げるため、野党のお株を奪うようなりべラルな政策を相次いで実行してきた。何よりもアベノミクスによる「大きな政府」政策がそうだし、「同一労働同一賃金」や「女性の活躍促進」はわかりやすい例だ。

それらは個人を最大限に尊重する理念にもとづいた政策のはずだが、安倍政権やそのコアな支持層のイデオロギーは個人よりも公や集団を重視したがる。この政権は理念的にはどっちつかずの状態にあり、そこに政権の弱点もある。野党が現政権に対抗しようとするなら、個人を徹底的に尊重する理念を軸に連携と政策づくりを進めることが必須となる。

718 ニュース日記 中村 礼治

なぜ独裁的か